



episode 33 四世代で読み継がれる、我が家の中の宝物

投稿者 浅野 理恵 さま(福島県)

「だいじょうぶ、だいじょうぶ。」

私が一番大好きな絵本には、この言葉がたくさん出てくる。それは『こんとあき』という絵本だ。共働きの両親に代わって、よく祖母が私の面倒を見てくれた。

私が学校から帰ると、祖母はよく絵本を読んでくれた。

私は『こんとあき』が大好きで、何度も読んで欲しいとせがんだ。

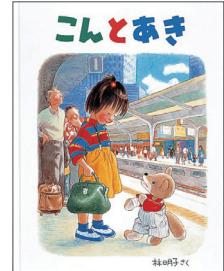
そのうちに祖母は「あき」を、私の名前である「りえ」と読み替えて読むようになった。

私の育った集落は、電車も海も遠い山里だった。

だから私にとって、あきになりきって、こんと大冒険をする物語は、心があっちこっちに旅する感覚で、とてもワクワクして、豊かな気持ちになった。

祖母の読んでくれる『こんとあき』が、私を広い世界へ連れて行ってくれた。

それは、祖母から孫への愛情そのものだった。



『こんとあき』
林 明子 作・絵
福音館書店 1989年

そして時が経ち、私は結婚して、娘に恵まれた。

ある日、娘と、老人ホームで暮らす祖母に面会へ行った。

百歳を迎えた祖母は、もう家族のことを思い出せないことも多かった。

祖母は、娘が持っていた『こんとあき』を見ると、にこりと微笑み、こう言った。

「懐かしいね。どれ、読んであげようか。」

祖母は絵本を手に取ると、私が幼かった日と同じ口調で、優しく読み始めた。

「りえちゃん、だいじょうぶ、だいじょうぶ。」私は、懐かしさと安堵感でいっぱいになり、自然と涙が溢れた。祖母の、あの日と同じ、優しい眼差しは、娘に向けられていた。

祖母との面会の帰りに、娘が尋ねた。「なんで、あきじゃなくりえだったの？」

私は、娘の手をぎゅっと握って、こう答えた。「あなたが、私の小さい頃に似ているから、間違えたのかな。

でも、伝わってきた優しさや、だいじょうぶっていう気持ちちは本物だよ。」

それを聞いた娘は、笑顔になって言った。「私、こんとあきも、ばあばも大好き！」

こうして四世代で読み継がれる『こんとあき』は、ますます我が家の中の宝物になった。

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2024」投稿作品より



本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300~450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまつたエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本をある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



平成生まれのロングセラー

きつねのぬいぐるみ“こん”と、幼い女の子“あき”2人の愛くるしい表情の表紙を見ただけで虜になるのは、小さな子どもたちばかりではありません。大人になってから、はじめて『こんとあき』に出会った女性たちの心をも強くすぐり、2人のファンは拡大する一方です。

その要因は、林明子氏の描く、ふっくら、きらっきらな表情にあるのではないでしょうか。表紙の2人を見た瞬間、愛おしさに包まれるタッチは魅惑的です。林明子氏の画について、絵本作家の長谷川撰子氏は、「子どもの肢体のとらえ方が絶妙で、官能的とさえ言える」と評しているように、まるで実物の乳幼児を見ているような可愛さにキュンキュンしてしまうのです。

日本が平成になったばかりの1989年に登場した『こんとあき』も、気づけば出版から36年、立派なロングセラーの立ち位置にあり、日本の絵本界をけん引しています。

挿絵画家が絵本作家になるまでの道のり

作者の林明子氏は、1973年、『かみひこうき』でデビューしました。つまり、2023年にデビュー50周年を迎えたのです。

デビュー前、福音館書店の月刊誌「母の友」の挿絵を担当していた林氏は、同社の月刊雑誌「かがくのとも」のイラストの仕事を持ちかけられるのです。そして、科学教育者である小林実氏の文章に絵を描いたのがデビュー作です。1975年には再度、小林実氏の文章に絵を描いた『しゃほんだま』が「かがくのとも」に掲載されました。

そして、当時、福音館の若手編集者などが集まる読書勉強会に参加するようになり、そこで月刊絵本「子どものとも」の編集者からお声がかかります。それが、筒井頼子氏との出会いとなって、「子どものとも」1976年3月号で『はじめてのおつかい』を発表す

るので。以後、筒井&林コンビの共作絵本が生まれるので。『はじめてのおつかい』は、1977年に単行本化されてから、昭和、平成、令和の子どもたちの「おつかい」魂に火をともし続けています。

林明子氏は、筒井氏だけでなく神沢利子氏や瀬田貞二氏など、他の絵本作家のテキストにも絵を描き続けてきました。その経験を積み重ねて11年、はじめて文も絵もひとりで手掛けた幼年童話『はじめてのキャンプ』(1984年)を発表します。その後、精力的に単独での創作活動に力を入れ、「くつくなつあるけのほん」シリーズ(全4作)、「クリスマスの三つおりもの」セット(全3作)、そして『こんとあき』が生まれるので。

家族のアルバムみたいな作品

林明子氏の創作活動は、実際にモデルをつくって、被写体を描写するスタイルでした。あきのモデルとなつたのは、その頃、年齢がぴったりだった姪御さんの“あきちゃん”で、相棒の“こん”は、林氏自ら型紙からつくった、ワイヤー入りのきつねのぬいぐるみだったのです。絵本の扉と巻末に附されている型紙が、“こん”的ぬいぐるみになります。林氏は、誰でもが“こん”をつくって遊べるしかけを絵本に施したのです。

他にも、“こん”と“あき”が訪ねていくおばあちゃんは、亡くなった鳥取のおばあちゃんがモデルになっています。子どもの頃、よく砂丘に連れて行ってくれた想い出がそのままお話になっていて、『こんとあき』は、「家族のアルバムみたいな作品」と作者本人が述べているくらいです。

林氏の「家族のアルバム」のような絵本は、読んだ人それぞれの物語となって、これから時代も生き続けるのです。

文献

- 1) 福音館書店「母の友」編集部：絵本作家のアトリエ3, 東京, 福音館書店, p.67-80, 2014.
- 2) 林明子：名作絵本が生まれた日「こんとあき」, 月刊 MOE 38(5), p.94-97, 2016.
- 3) 長谷川撰子：絵本が目をさますとき, 福音館書店, 東京, p.152-159, 2010.